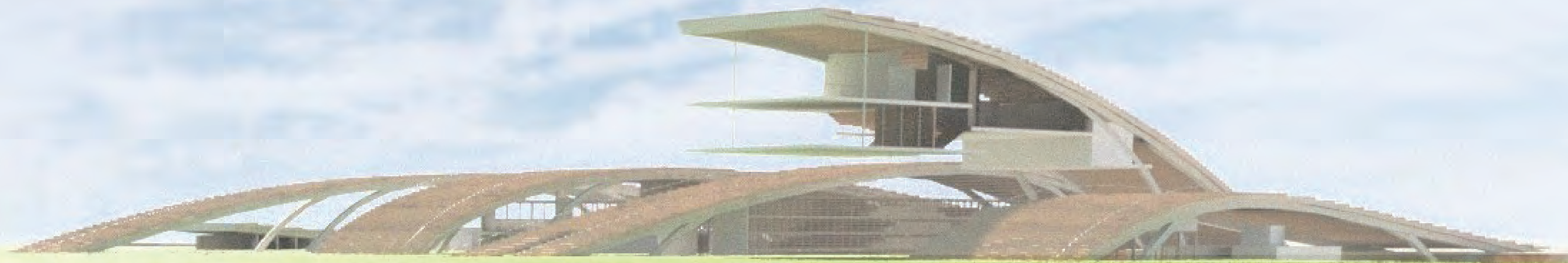


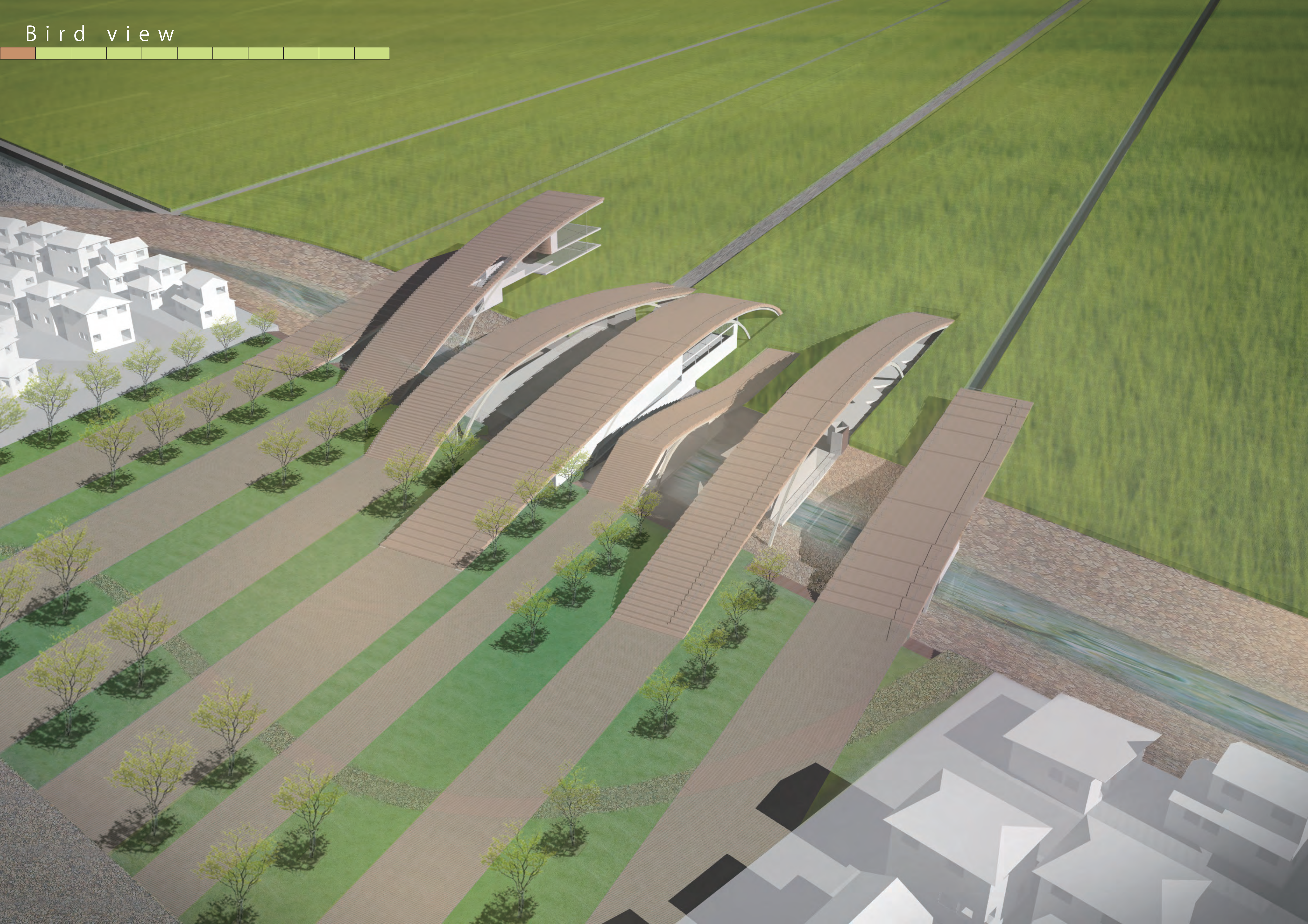
田んぼとの暮らしかた

ー地産地消によるコミュニティの再建ー

R09055 中橋 茉優子



Bird view



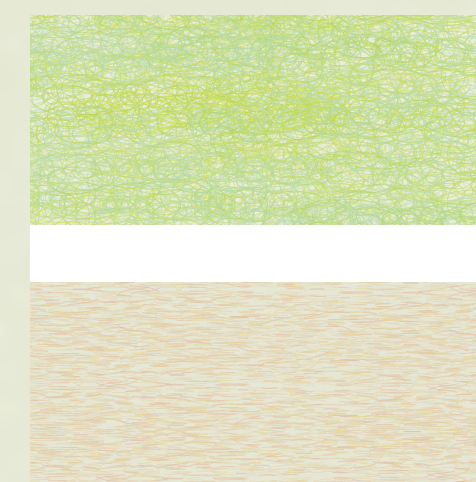
Prologue

私たちはひとりで生きていく事は出来ない。

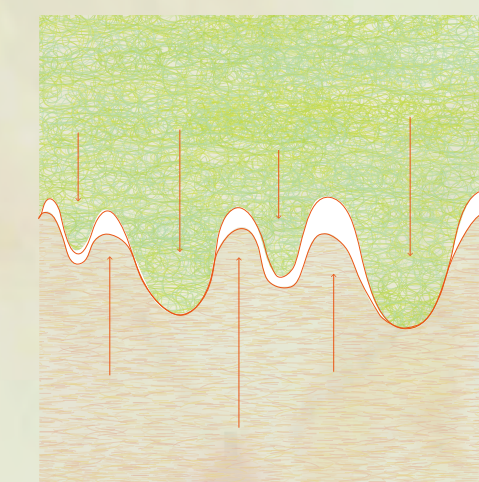
しかし、現代ではご近所付き合いという関係は無くなりつつあり、高齢者が孤独死する時代となってしまった。

■Concept

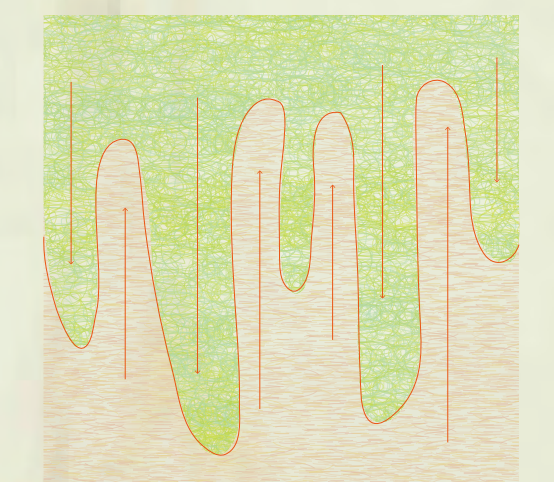
今は深作川を境界に関わることなく隣接している田んぼと住宅地。
この両者のインターフェースとなる建築を設計する。



田んぼと住宅地が関わる
ことのない現状。



この境界にインターフェースとなる建築を置くことで、田
んぼと住宅地が互いを浸食し合い、隔たりが消える。



Site

背景

高齢者の孤独死、この問題の背景には人々が都市に寄生している社会がある。都市に情報や仕事やモノを求め、都市と繋がることによって満たされる生活を送る。従って自分の住む土地への愛着心は薄れ、人々に感心をもたれなくなった土地は自立する力を失った。今一度住人の手で土地に自立する力を与えるべきだ。

目的

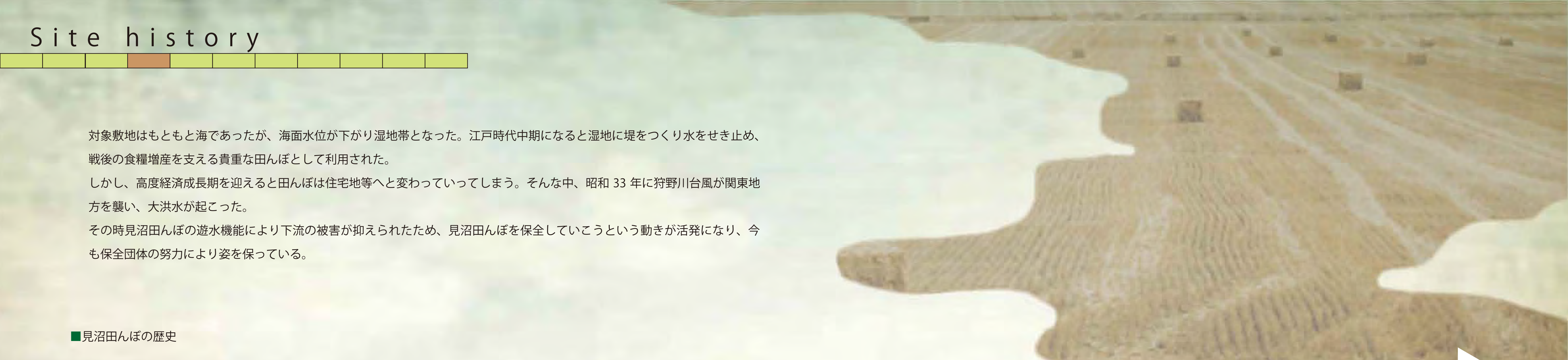
かつて見沼区は田んぼによって多くの人々の生活を支えてきた。しかし今では、田んぼを営む人以外の住人の生活を支えているのは都市となってしまった。田んぼに再び目を向けさせるきっかけとなる建築を提案し、そこで行われる行為によって自立したまちへと変化させる。

選定敷地

埼玉県さいたま市見沼区春野

対象敷地北側には田んぼ、南側には住宅地が広がっている。田んぼを営む人々は田んぼより北側に住み、昔からのコミュニティによって協力し合いながら農業に励んでいる。一方住宅地に住む人々は田んぼ側に背を向けて家を建て、毎日電車で都市に出向き、都市に支





Site history



対象敷地はもともと海であったが、海面水位が下がり湿地帯となった。江戸時代中期になると湿地に堤をつくり水をせき止め、戦後の食糧増産を支える貴重な田んぼとして利用された。

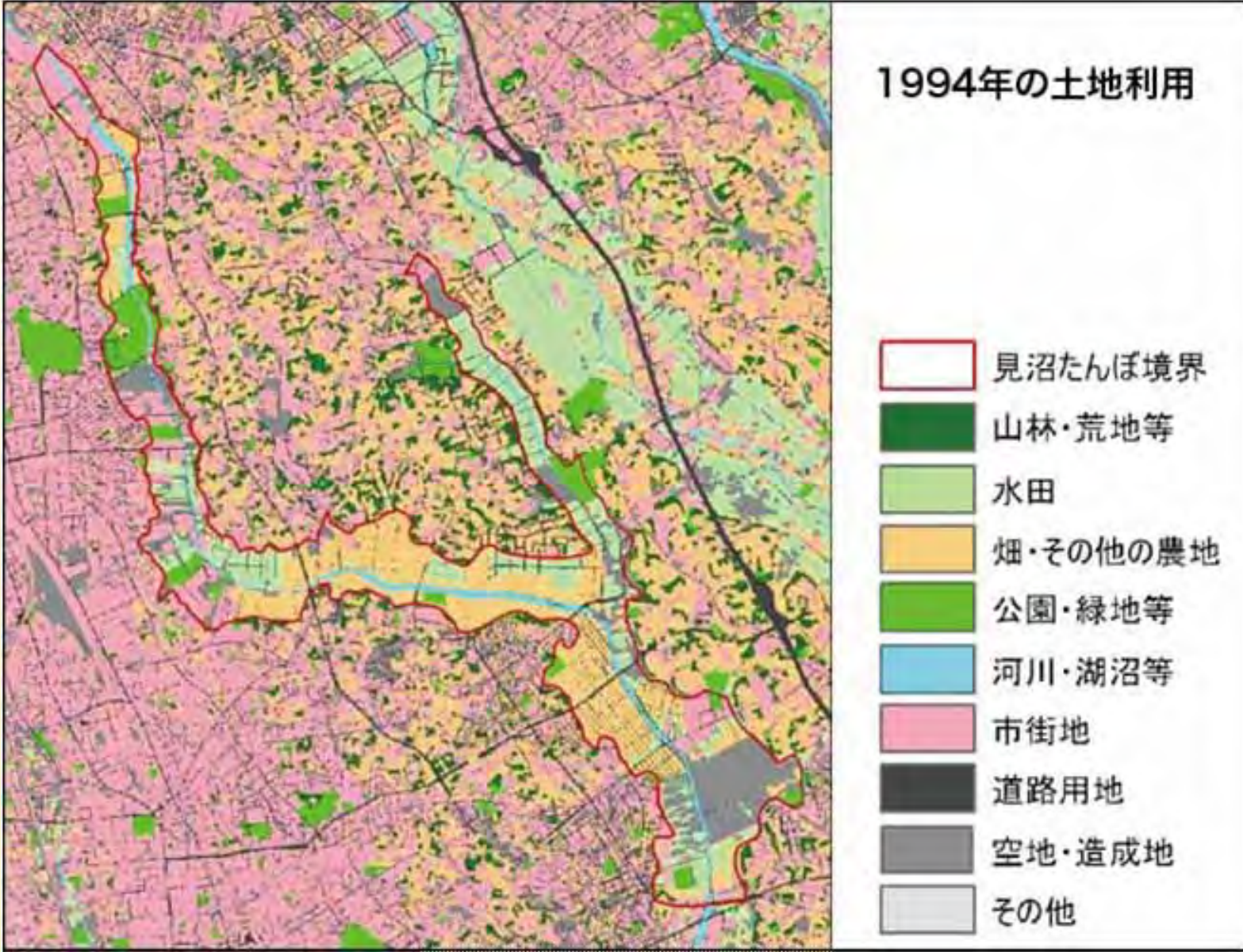
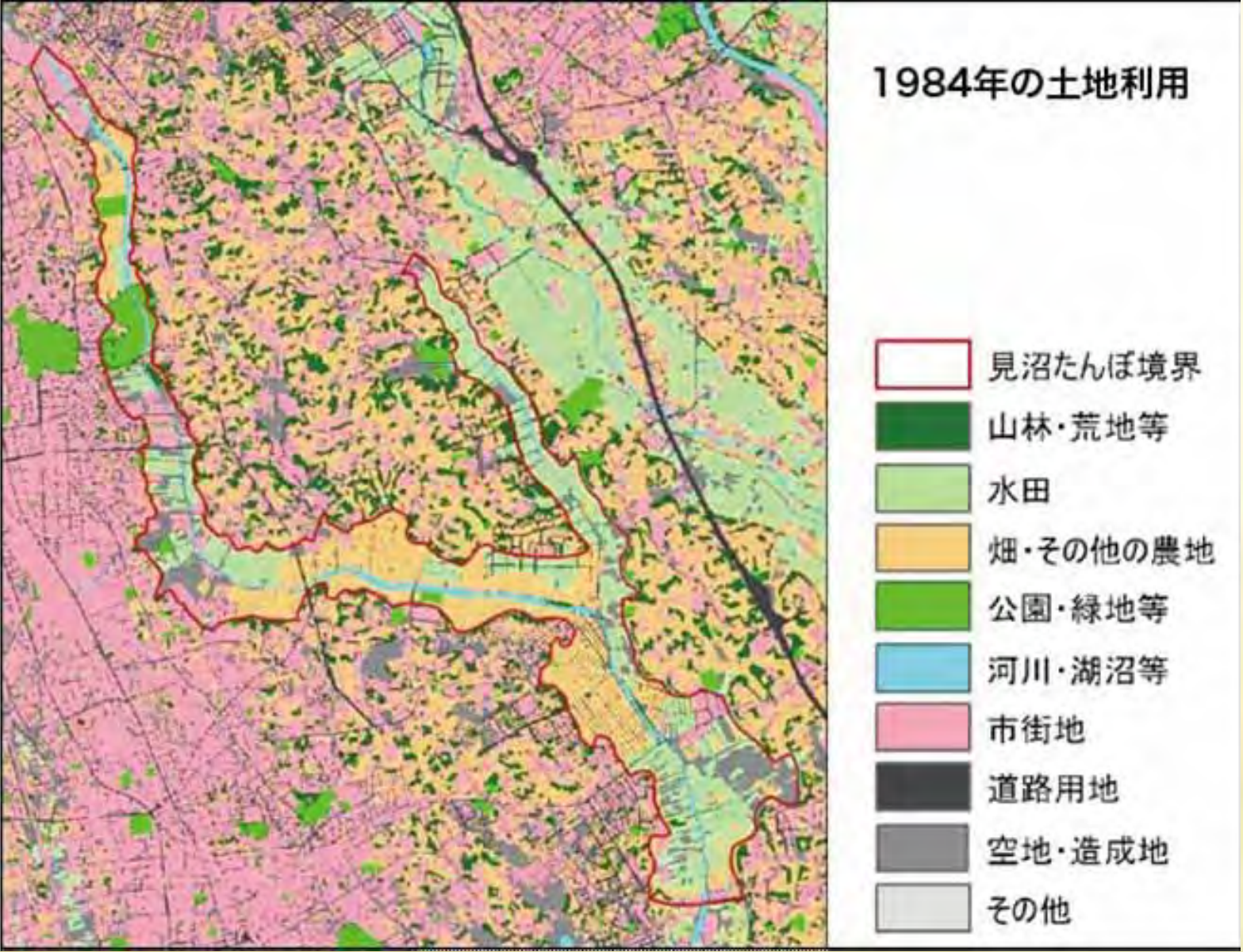
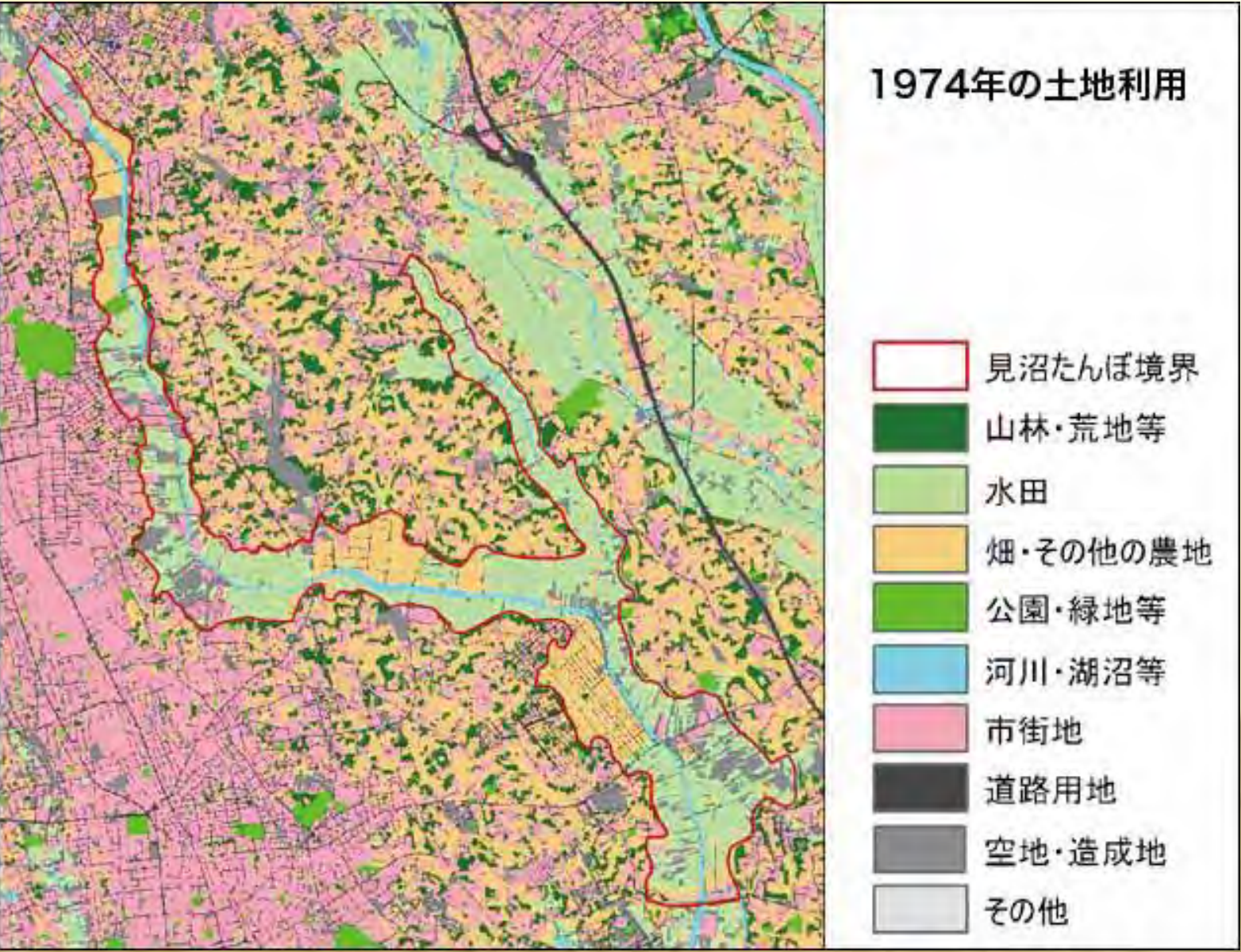
しかし、高度経済成長期を迎えると田んぼは住宅地等へと変わっていつてしまう。そんな中、昭和 33 年に狩野川台風が関東地方を襲い、大洪水が起こった。

その時見沼田んぼの遊水機能により下流の被害が抑えられたため、見沼田んぼを保全していこうという動きが活発になり、今も保全団体の努力により姿を保っている。

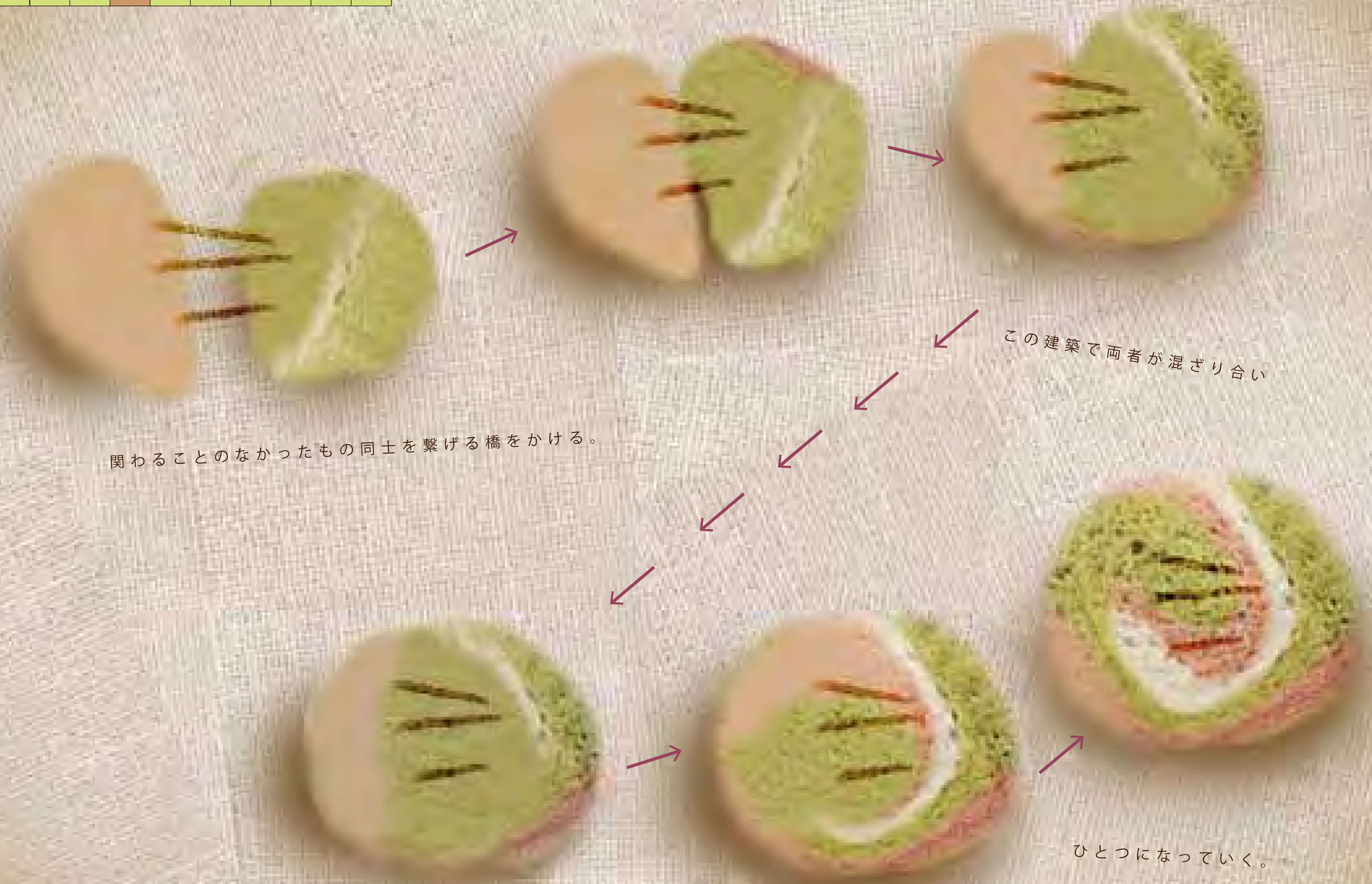
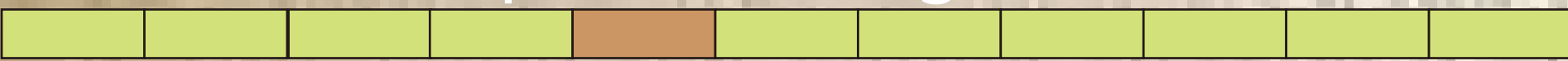
■見沼田んぼの歴史

■自然の時代	■ため池の時代	■田んぼの時代	■宅地化の時代	□1958 年 狩野川台風関東直撃	■保全の時代
縄文時代～江戸時代初期	江戸時代初期～中期	江戸時代中期～戦後	1950 年以降		1958 年～現在
海面は現在よりも高く、現在見沼区 の地域は東京湾とつながる入江であ った。その後海が後退し、東京湾と 分離して無数の沼・湿地が生まれ た。	耕地安定化のため荒川の西遷工 事を行い、下流地域が水不足に陥 ったため、貯水量を確保するため 見沼溜井がつくられた。	幕府の財政改革（享保の改革）の ため、池沼の新田開発が行われ た。	高度経済成長期を迎えると、東京 都市圏の拡大に合わせて宅地化が 進んだ。	芝川下流域が浸水するという大き な被害があった。この時、見沼田 んぼが全域に渡って湛水したこと により、下流の被害が抑えられた ため、見沼田んぼの遊水機能が注 目される。	狩野川台風の時下流を守った見沼 田んぼを守ろうと、宅地化が禁止 された。現在では、関東圏で有数 の面積を誇る緑地帯となっている。

■見沼田んぼの土地利用変遷



Concept Diagram



Constructure



■橋板

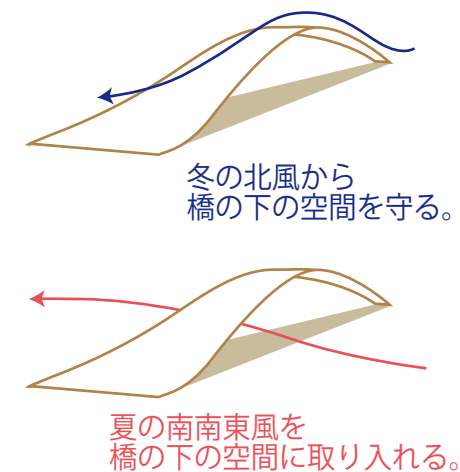
道であり、床であり、屋根である。

地域で取れる木材を用いる。 壊れたら地域住民で修理する部分。

田んぼ側と住宅側の地表面温度の違いから、対象敷地は風がよく吹く。季節ごとの風向に合わせた形態を採用する。



(青；地表面温度低 / 赤；地表面温度高)



冬の北風から橋の下空間を守る。

夏の南南東風を橋の下空間に取り入れる。

■構造体

この構造体で建築全てを支える。

残り続ける部分。 構造体を頼りに、 住人達は建築に手を加えていく。

■壁・その他

風を建築内に取り込むよう配置。 極力減らし、風が通りやすくした。

この場所の特徴である風を積極的に取り込む。 屋根の下にしながらも、 田んぼや川を感じられるようになっている。

■スラブ

田んぼとの距離が様々な配置。

スラブごとに異なる田んぼとの距離感を楽しむ。 川の高さまで低くなっているスラブからは川に降りることもできる。

田んぼと様々な関わり合いができるように、レベルの違うスラブを設ける。



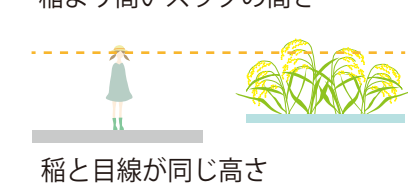
田んぼとスラブが同じ高さ

田んぼが間近に迫る。すぐ田んぼに出られる。
例；カフェ、米と薬のストック、農業体験・見学、パン屋



稲より高いスラブの高さ

田んぼが一望できる。風がよく吹き抜ける。
例；レストラン、農業体験・見学



稲と目線が同じ高さ

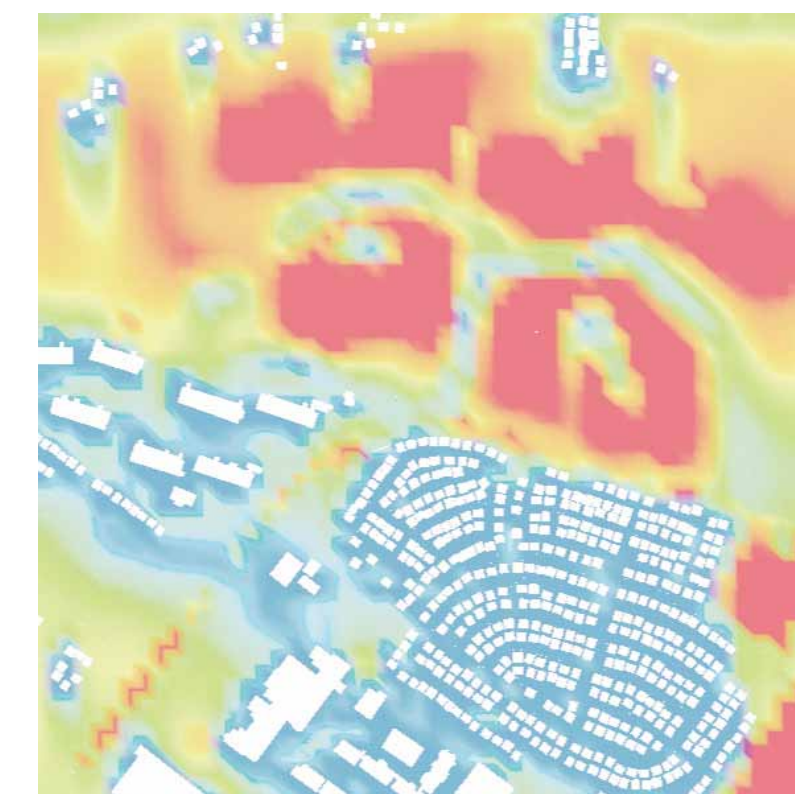
田んぼで外が見え隠れする。川に降りることができる。
例；居酒屋、体験工房

■全体

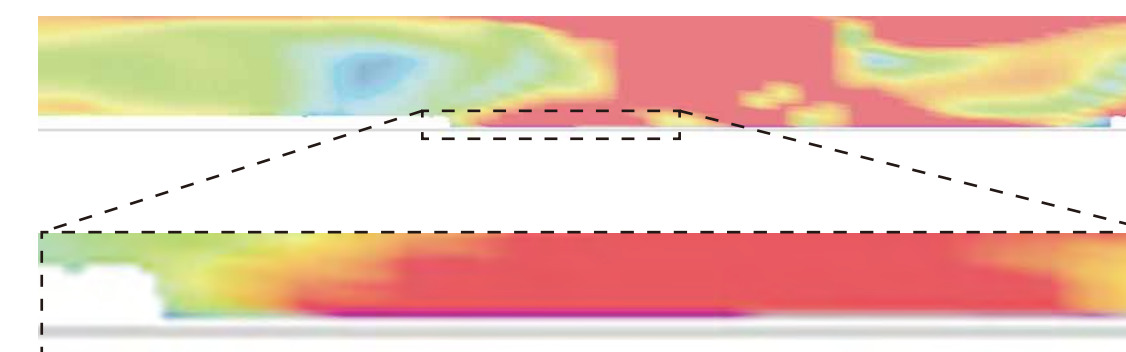
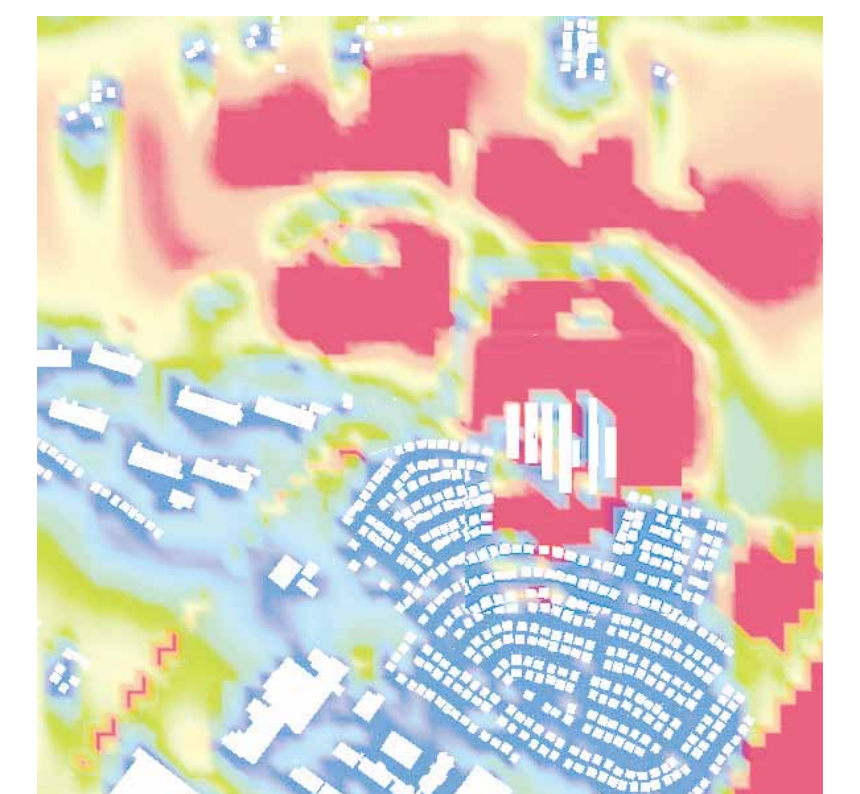


Enviromental analysis

■現在の対象敷地

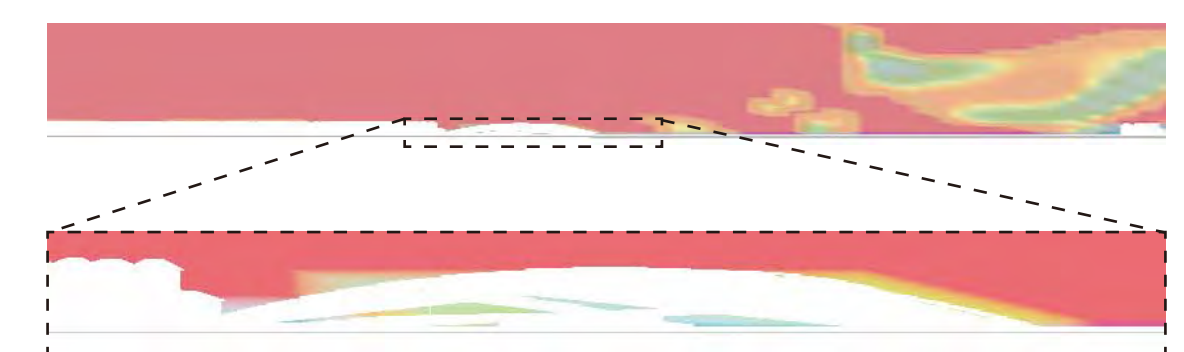


■建築後の対象敷地



■解析結果

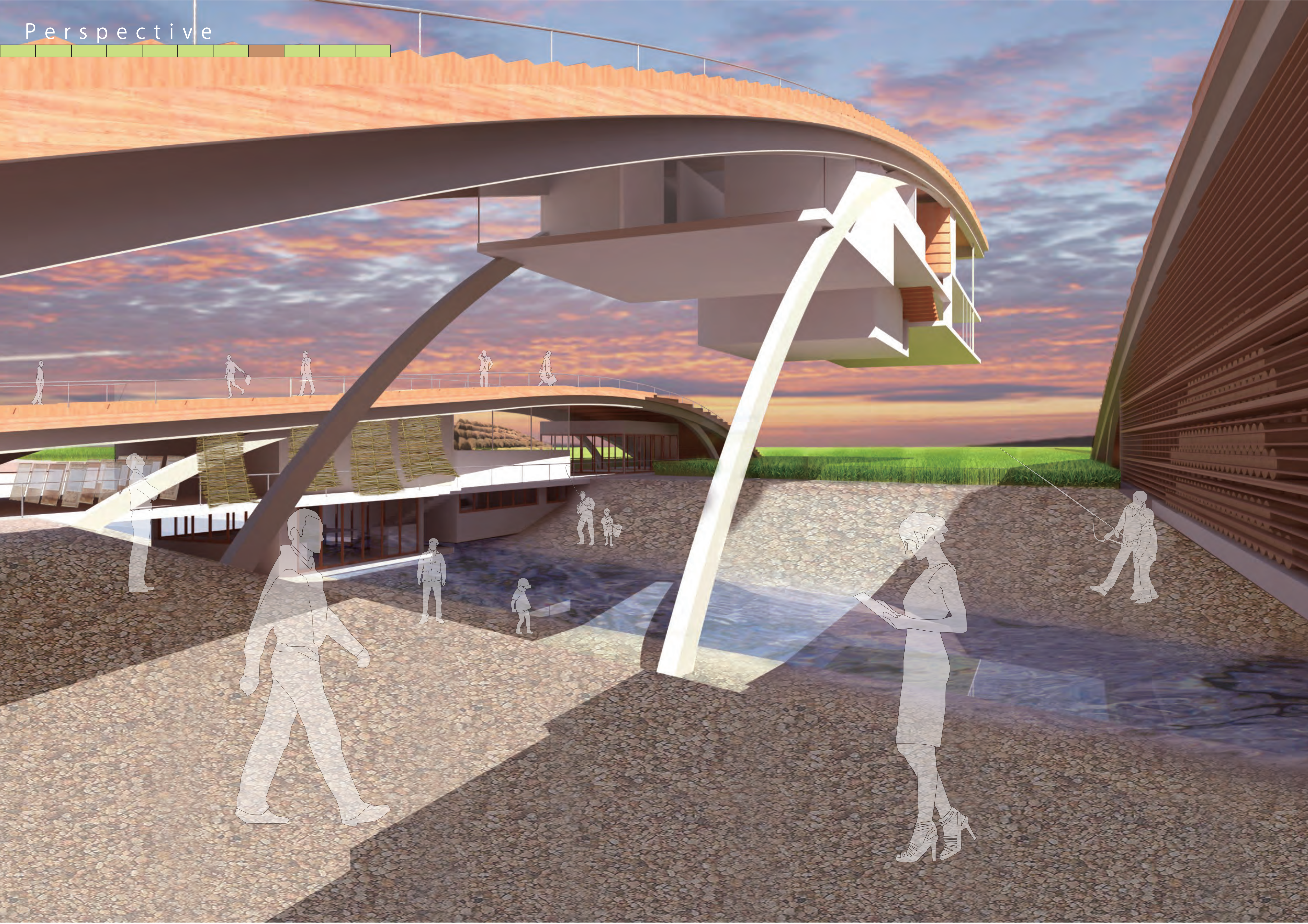
現状の敷地の風量を解析してみると、住宅が立ち並んでいる田んぼとの境界で風が止まってしまっているのがわかる。もっと住宅地側に風を流すことができるよう、設計する。

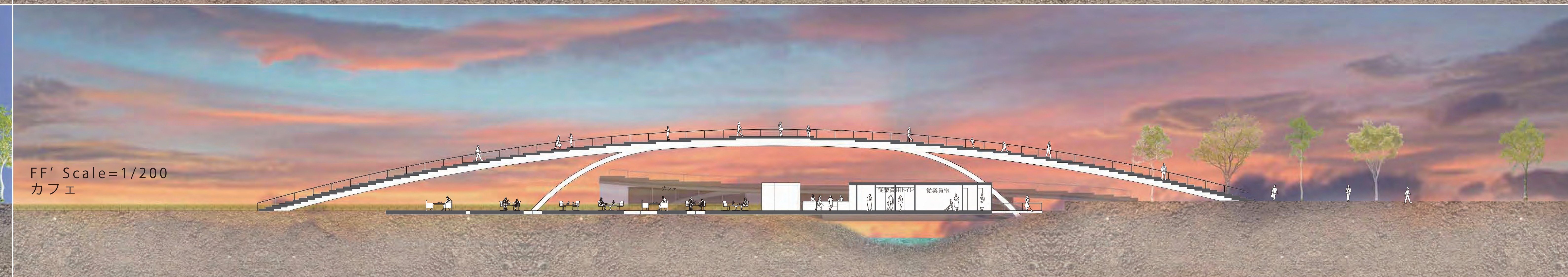
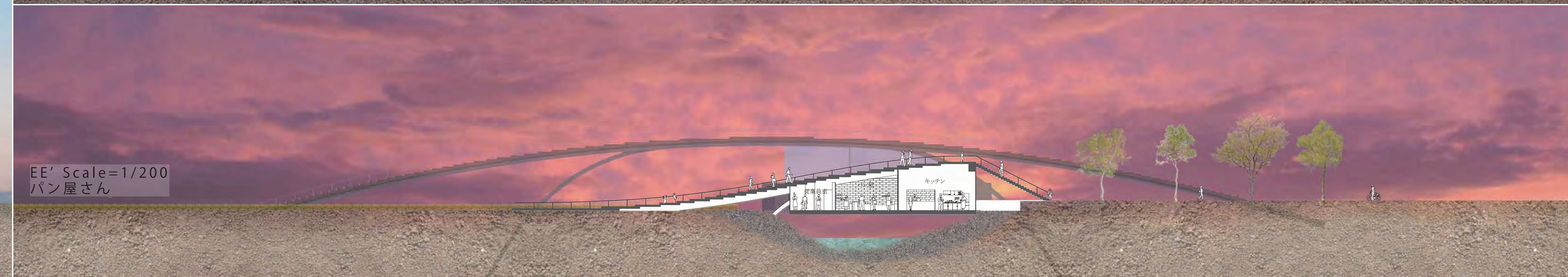
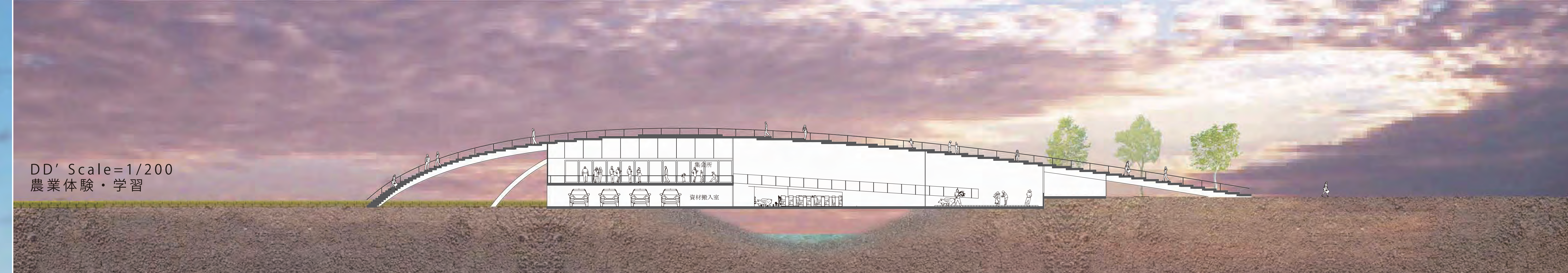
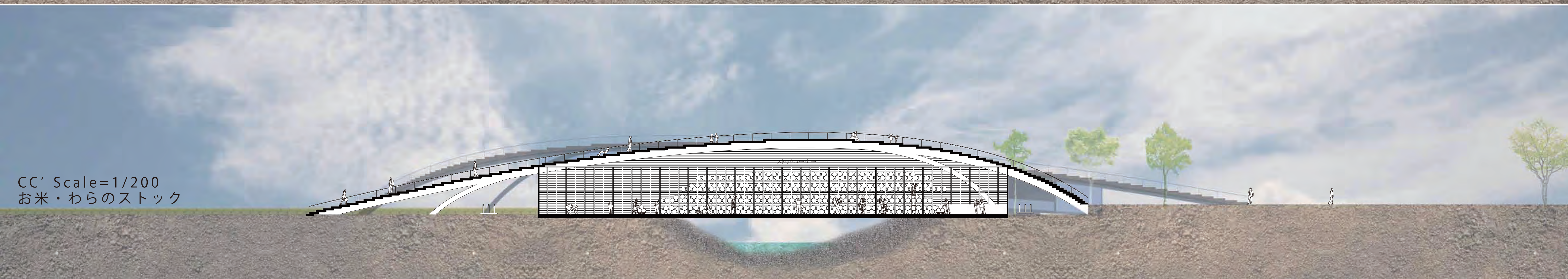
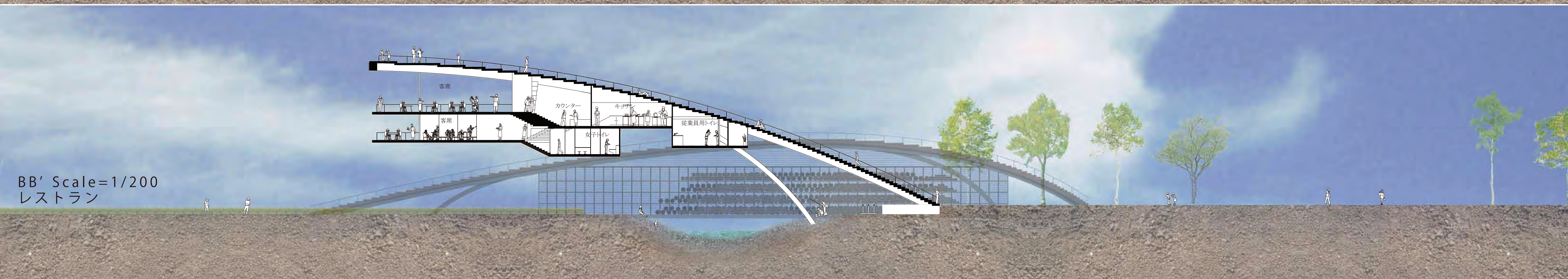
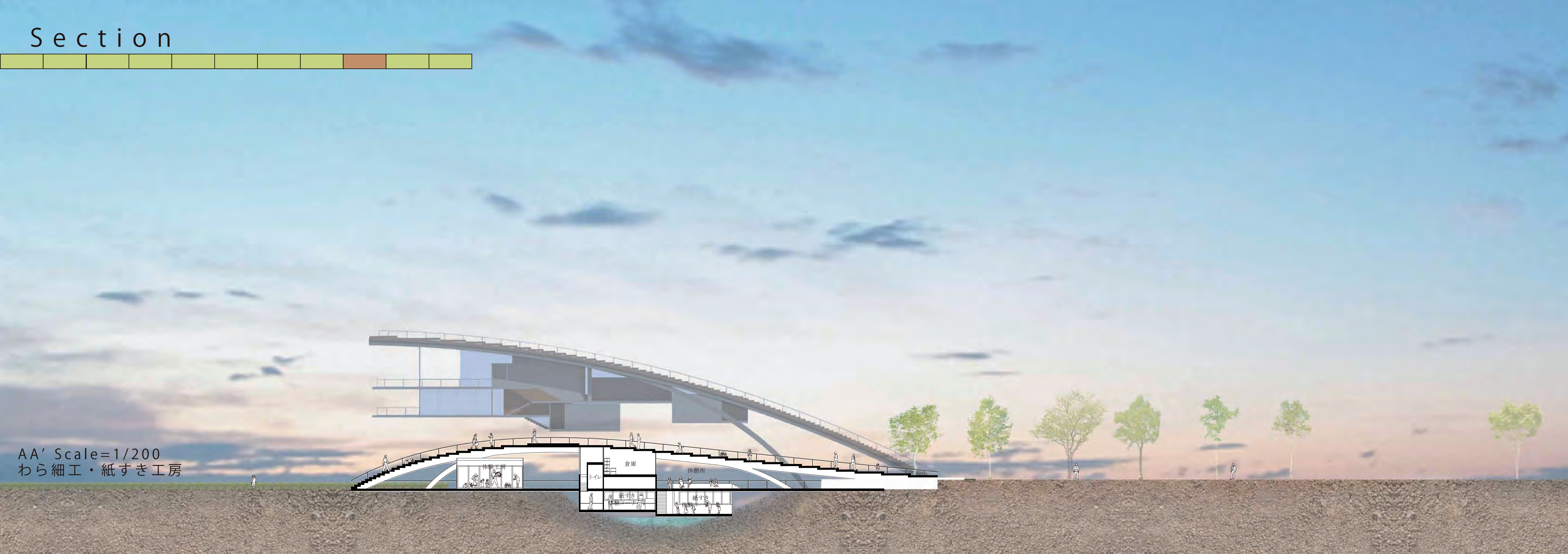


■解析結果

橋のような建築を、住宅地と田んぼの境界に置く。すると、風は建築の屋根を伝い、または建築間のすきまを抜けて、住宅地奥の方まで風が抜けるようになった。

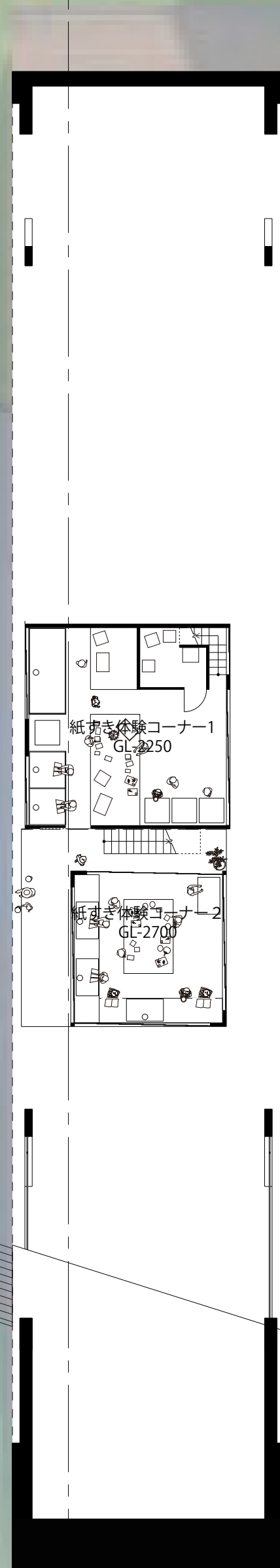
Perspective





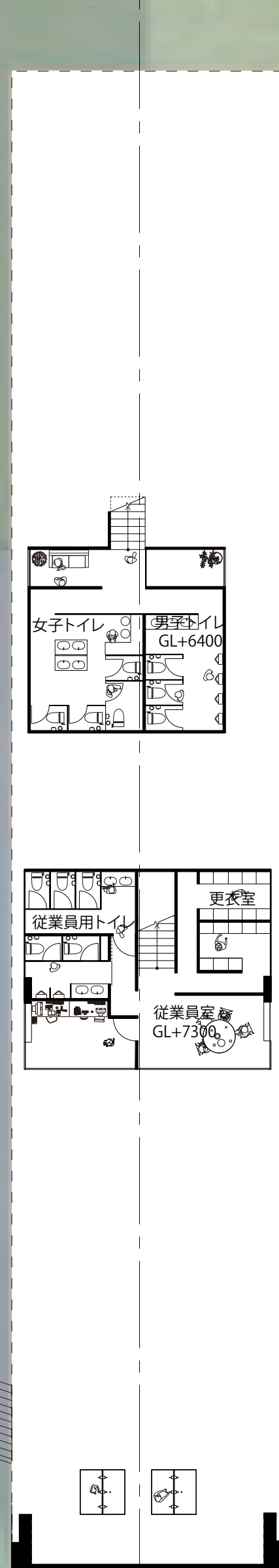
Plan

A
わら細工・
紙すき工房



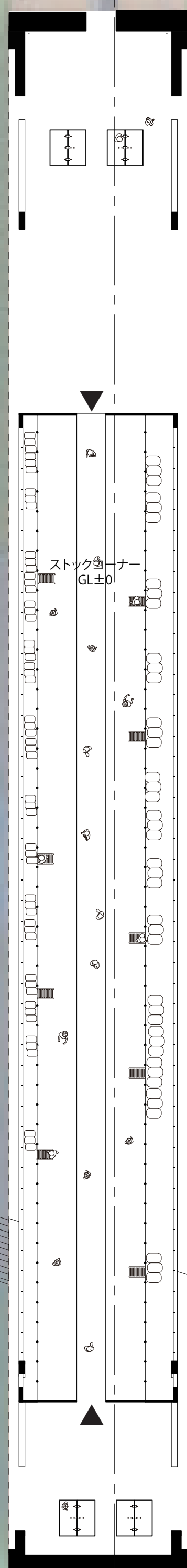
A'

B
レストラン



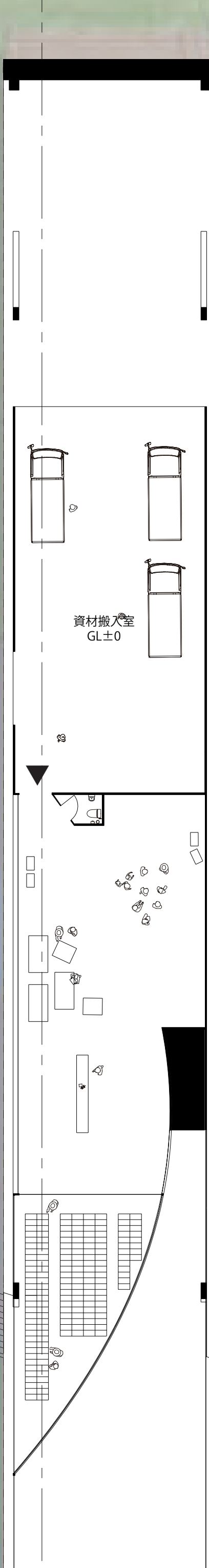
B'

C
お米と蕨の
ストック



C'

D
農業体験・学習



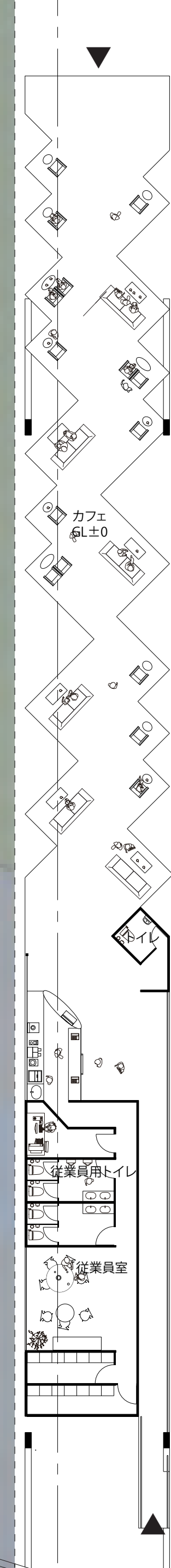
D'

E
パン屋



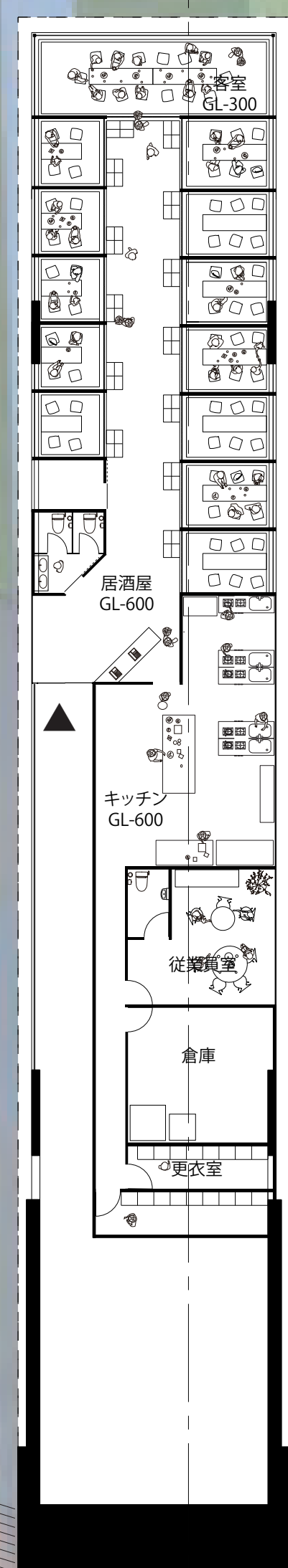
E'

F
カフェ

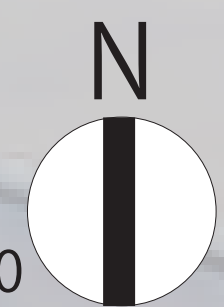


F'

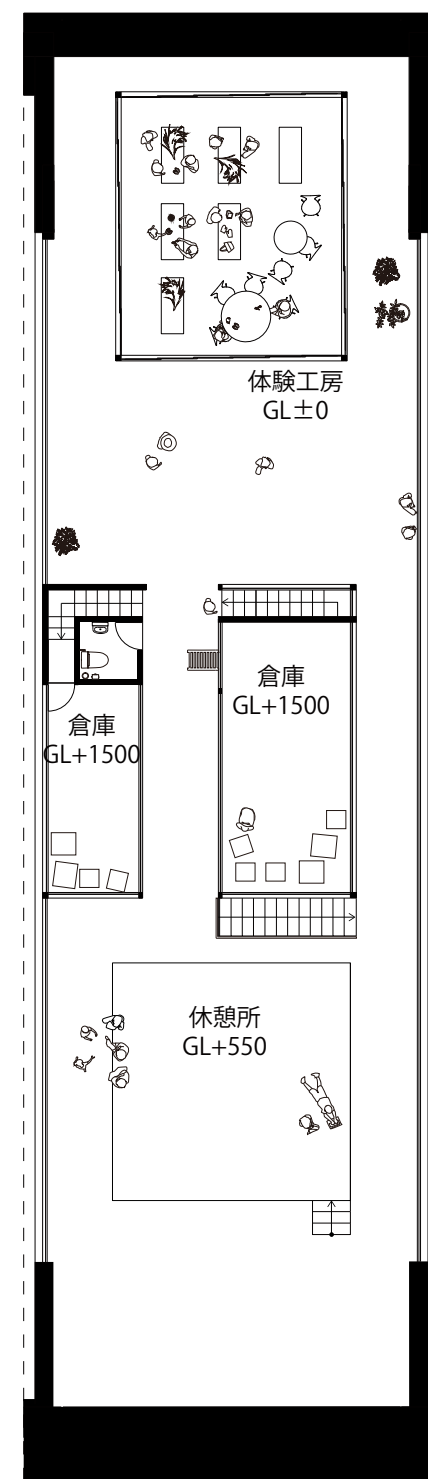
G
居酒屋



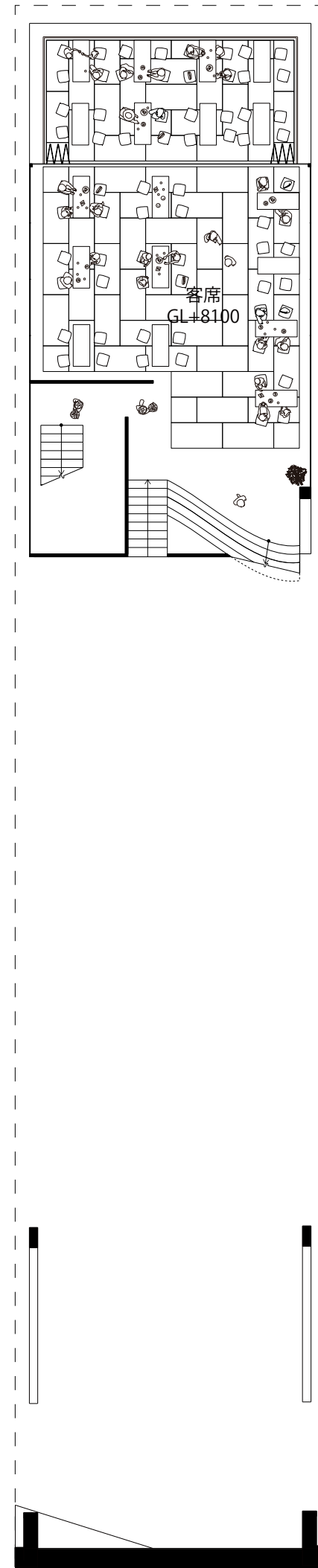
G'



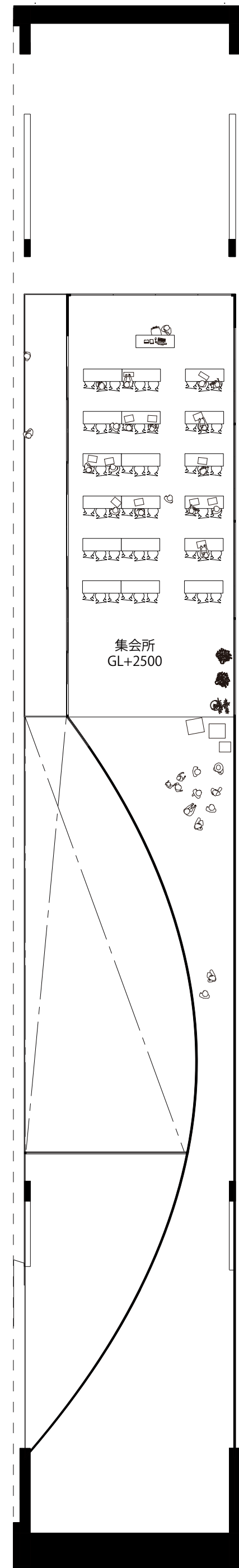
わら細工・紙すき工房



レストラン



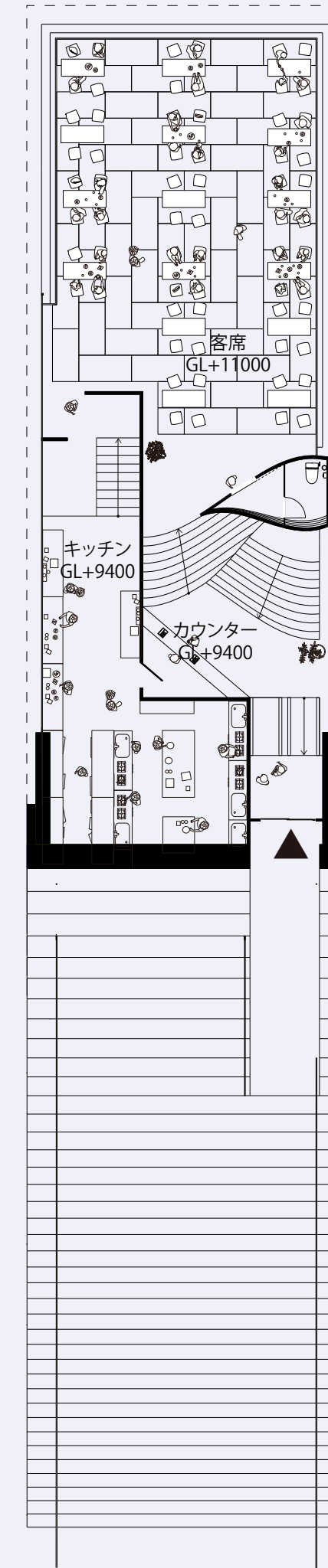
農業体験・学習



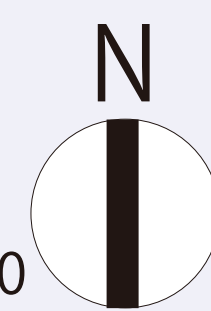
Plan 2F
Scale = 1/200

0 10 30 50 (m)

レストラン



Plan 3F
Scale = 1/200



Perspective



お米・わらのストック



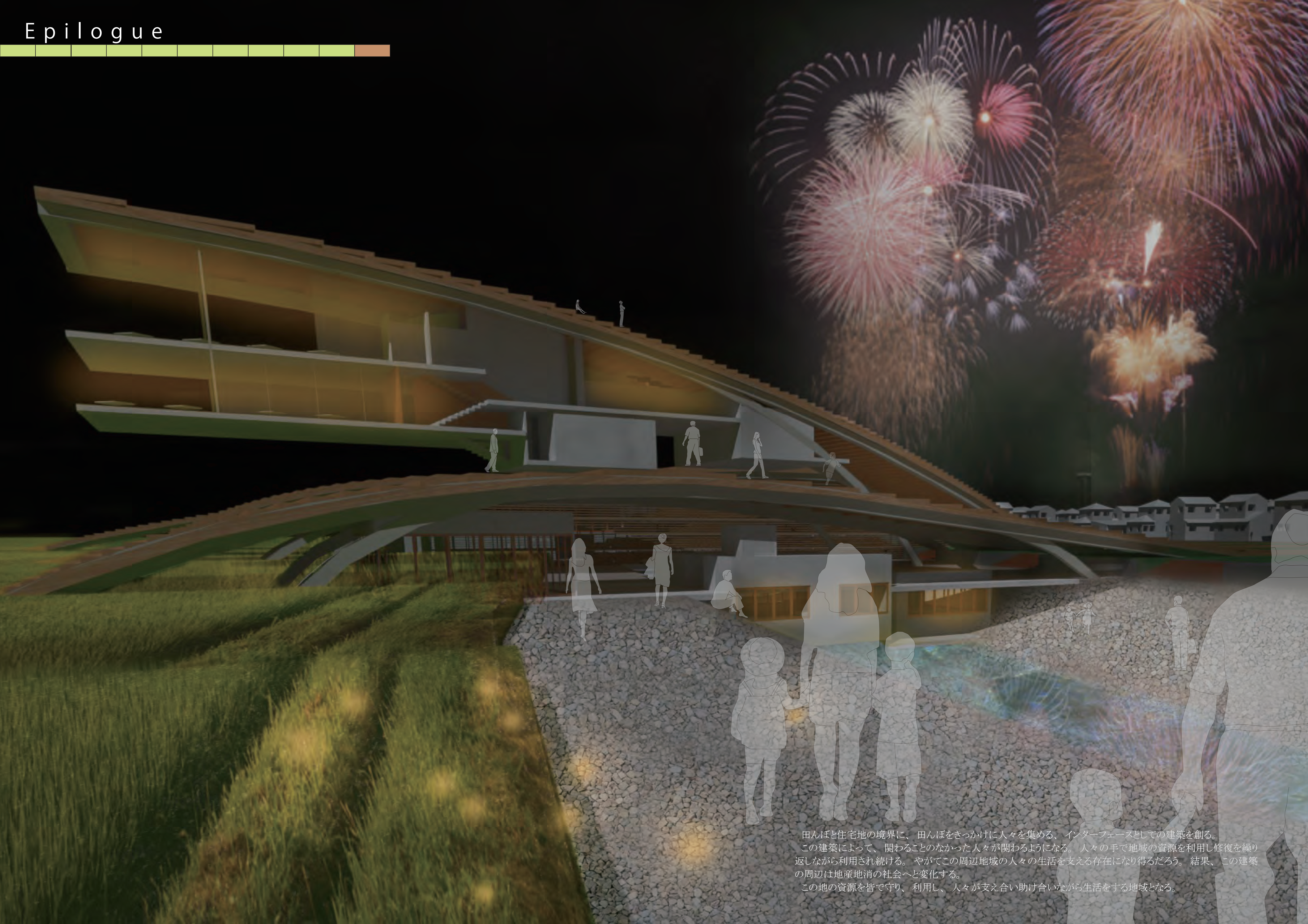
カフェ



パン屋



居酒屋



田んぼと住宅地の境界に、田んぼをきっかけに人々を集める、インターフェースとしての建築を創る。この建築によって、関わることのなかった人々に関わるようになる。人々の手で地域の資源を利用し修復を繰り返しながら利用され続ける。やがてこの周辺地域の人々の生活を支える存在になり得るだろう。結果、この建築の周辺は地産地消の社会へと変化する。この地の資源を皆で守り、利用し、人々が支え合い助け合いながら生活をする地域となる。